

# 中国における日本語学習者の イントネーション・語調の指導

- VCD教材を用いた実践 -

成 田 愛裕子

(前上海旅遊服務職業技術学校)

## Instruction of Japanese Pronunciation and Intonation in China ; VCD Instruction Tool

NARITA AYUKO

(ex-Shanghai Tourism Professional School)

### 要 旨

2000年9月から2002年6月まで上海旅遊服務職業技術学校に勤務し、中国在住の日本語学習者にとって、自然な日本語のイントネーション・語調を習得することがとても難しいことを実感した。誤解を招くようなイントネーション・語調での発話を避けるために行ったVCDを用いてのイントネーション、語調の指導の実践報告。

### 1. はじめに

「お名前は?」「あああー?」

授業初日のことである。「あああー?」まるで、喧嘩を売っているかのような、尻上がりのイントネーション、語尾に近づくにつれて大きくなる声量、強い語調。新しい学校での第1日目、期待に胸を膨らませていた私はその一言でひるんでしまった。

2000年9月から2002年6月までの約2年間勤務した上海旅遊服務職業技術学校でのことである。日本人の「え、何ですか?」という軽い問い返しの言葉を、ここ中国では「あああー?」の一言で済ませてしまうことがよくある。学校内だけではなく、レストランなどでも店員が注文を聞き取れなかったようなときに、この「あああー?」をよく耳にする。この言

葉を発した本人に決して悪気はないのだが、やはり日本人の耳には心地よく響かない。

また、このようなことがあった。友人が上海に旅行に来るというのでいい機会だと思い、授業に参加してもらった。日本語教師以外の日本人(外国人の日本語に慣れていない日本人)との交流を通して、自分たちの日本語がどのくらい日本人に通用するものなのかを体験させようと思ったのだ。学生は想像していたよりも積極的で、次々に質問をし自分の日本語が通じ、相手の話していることがわかることに一喜一憂していた。短時間だったこともあり、伝えたいことを伝える、相手の言っていることが理解できるという面では問題なかったのだが、やはりここでも語調の強さが耳についた。次の日の日本語クラブにも参加

してもらうことになっていた友人が「明日の日本語クラブには来ますか。」と質問したところ「行きますよ。」という返事が返ってきたのだが、「ま」をかなり高く強く発音し、終助詞の「よ」が下降調だったため、「行きますよ」の後に「行けばいいんでしょ！」と続くような印象を与え、友人を驚かせてしまったのだ。

日本語の高低差よりもその差のひらきが大きい中国語を母語に持つ中国在住日本語学習者の語調の強さは、不確かなイントネーションとも関係し、日本人にはかなりきつい印象を与えることがある。上海に住む日本人が集まるとよく話題になり、私自身も日頃から気になっていたことである。確かに、日本在住の日本語学習者に比べて格段に生の日本語に触れる機会が少ない学習者にとって、日本語の自然な語調、イントネーションを習得することは困難なことである。

このようなことから授業の中でも日本語の自然な語調、イントネーションを特に意識して注意するようにはしていたが、なかなか学生の印象には残らないようだった。そこで、中国では一般的に普及しており、手軽に安く手に入るVCD（又はDVD）を教材として用いたところ効果的であった。（担当のクラスでアンケートした結果、ほとんどの学生の家にVCD再生機、もしくはDVD再生機があり、ソフトも5元から10元で手に入る。ちなみに1ヶ月にもらう小遣いは50元から100元という学生が多かったので、学生の小遣いの中でも手軽に買える価格である。）

## 2. VCDを用いた実践

私が担当したのは会話クラスで、平仮名・片仮名がやっと読み書きできるレベルから基本的な文型は既習済み、ある程度の会話なら問題のないクラスまで様々である。その中である程度の会話なら問題のない3年生の学生を対象に、問い返しの言葉と文末の語調・イ

ントネーションの指導をVCD教材を用いて行った。

教材となるVCDは多くの学生が見たことがあることを前提に、学生と同年代の登場人物が多い学園物の日本ドラマを選んだため、最初の授業での学生のくいつきが良かった。また、その他に中国のテレビでも放映していたことがあり、ほとんどの学生が主人公のキャラクターを知っている小学生の日常生活を描いたテレビアニメを用いた。（準備段階で、このアニメは高校生には幼稚で学生が嫌がることも考えたが、実際にはテレビドラマよりも表情や動きが単純でわかりやすく、使われている言葉がやさしかったため学生は馴染みやすかったようである。）

### 授業例

#### (1). 問い返しの言葉

初めに、故意に何を言っているのかわからない小さな声で学生に適当な質問をする。どのクラスでも何人かに質問するとすぐに「ああー？」という問い返しが返ってくるので、自分たちが問い返しに使う言葉（中国語・日本語）をメモさせる。次に登場人物の表情や状況から喧嘩をしていることが明らかな場面を選び、初めに音声と中国語字幕を消して、何をしている場面なのか、登場人物の気持ちを考えさせる。次に、その場面の音声を何度か聞かせ学生にリピートさせる。この時点で、ほとんどの学生が日頃自分たちが口にしていく「ああー？」が、日本語の中ではどのような場面で使われているかということに気が付き、笑い出したり驚いたりしていた。その後、男女2人が穏やかに話している場面で、男性の「ああー？」という言葉に女性が露骨に嫌な顔をし、言い合いが始まるシーンなど、「ああー？」が使われている他の場面も見せ印象付ける。

次に、自然な日本語会話ではどのようなときにどのような問い返しが使われるかを考え

る。登場人物の人間関係、話の展開を理解させるためにある程度まとまった場面を問い返しの言葉をメモさせながら見せる。メモしたものを発表させると「ああー?」「え?」「えええー?」「はあ?」「はい?」「何?」「今、何て?」「え?何ですか?」「あ、すみません」等がでてきた。今度は、人間関係と発話時の心理を考えさせ、ワークシートにチェックさせながらもう1度同じ場面を見る。ワークシートのチェック欄は、上の者が下の者に向かって発話、下の者が上の者に向かって発話、友達に向かって発話、よく知らない人に向かって発話、心理 怒っている、喜んでいる(嬉しい)、驚いている、特になし(平常心)に分け、相手の反応は単純な表情のイラスト(怒っている顔、驚いている顔、平常の顔)から選びチェックさせる。チェックしたものと場面を見比べながら、1つずつ確認してリピートさせ、同じ問い返しの言葉でも発話する相手、発話時の心理によって語調が違うことを確認する。この場面では、特に「ええ?」という言葉が多く発話され、その語調も様々だったのでいい練習となった。

最後に、練習として5~6人のグループに分け、ドラマの登場人物(校長、同僚教師2名、学生2名、売店の店員)に配役する。先ほどとは違うごく短い場面のスクリプト(このスクリプトは実際のドラマで発話されたよりも簡単な言葉に書き換え、会話数も少なくした。)を配り、音声を消して場面を見せる。その後ロールプレーさせるが、この時、先ほど出た問い返しの言葉を全て用いること、用いる箇所は自由、語調が適切に注意することを指示する。発表の際には、語調、使われている問い返しの言葉は適切か、相手の反応はどうかをグループごとに指摘し合わせた。この練習は思ったより時間がかかってしまったが、もともとロールプレーが好きなクラスだったため、発話者の心理によりその語調と態度を変えたり、発話相手の心理も考えながら演技

させることができた。(問い返しの言葉以外のイントネーション等に関しては、よほどひどくない限りはここでは軽く注意する程度にとどめた。)

## (2). 終助詞の使い方(文末のイントネーションと語調)

上記の「行きますよ」の使い方を考えると、文末のイントネーションを軽い上昇調にするか、終助詞を使わず「行きます。」とだけ答えればよかったのだが、この例だけではなく、学生たちは終助詞をむやみに使いたがり、特に「よ」と「ね」の乱用が目立つ。そこで、誘い、許可、主張、相手の知らない情報を伝える「よ」と、同意、確認、依頼、感動の「ね」に限定しプリントを用いて使い方を説明した。その補助教材として、全体の語調、文末のイントネーションが違うだけで発話意図と、相手の受ける印象が全く異なってくるということを印象付けるためにアニメVCDを用いた。

小学生の姉妹と母親、祖父の会話場面のスクリプトを配布する。このスクリプトは終助詞の部分は( )で空欄とした。話の流れと意味の確認のため、音声を消し字幕だけで場面を見せる。その後、( )の中にはどのような終助詞が適切か、イントネーションはどうかを考え矢印で記入させる。プリントでの説明後であったため、ほとんどの学生が正しい終助詞を記入することができ、イントネーションの矢印もほとんど正しく記入されていたが、それを読ませると不自然な高低、強弱がついてしまう。そこで、1文ずつ学生に読ませた直後、音声を聞かせ自分のイントネーション、語調と、実際のそれとがどう違うのかを意識させる。この場面では「おつかいに行ってきた。」という母親に対して子供が泣々「わかりましたよ、行きますよ。」、外出する際に母親が子供に対して「行きますよ。」という発話があり、同じ「行きますよ」でも

イントネーションが異なると発話意図がどう変わるのか、また姉の新しい服を見て妹が「いいね。」母親が子供に対して「(宿題を)早くしてしまいなさい!いいね!」というときの「いいね」の語調の違いにより発話意図、受ける印象はどう変わるのか等を注意した。最後に、同じアニメの簡単な4コマ漫画の台詞と終助詞を考えさせ、グループごとにイントネーション、語調を注意しながら発表させた。この授業では「ね」と「よ」の使い方を全てを網羅できたわけではなく、VCDの中では初めにプリントで説明した「よ」と「ね」の使い方には当てはならないものも使われていたが、イントネーション・語調の重要性ということを印象付けるには効果的であったと思う。

### 3. 終わりに

私が担当した会話クラスでは指定教科書がなく学生との会話の中から気がついたこと、気になったことに焦点をあてて、その都度自由に教材を作成することが許されたためVCD教材を頻繁に扱った。日頃生きた日本語に触れることの少ない学生にとって、学習事項を自然に且つ強烈に印象付けること、また、この2年間を通して「いい授業」をするためのキーポイントとなった「学生の興味をいかにひくか」という面からみてもVCD教材が効果的であったためである。しかし、このような教材は物珍しさだけで教室は活気付くが、楽しいだけの授業にならないよう注意する必要がある。また、学習事項がその場だけでは

なく今後も自分のものとして使えるようにすることを目指したが、その達成はなかなか難しかった。しかし、学習項目を意識させ、強く印象に残すという面ではVCD教材は有効であったと思う。

また、教科書の「です・ます体」に慣れている学生にとって、VCDドラマで多く使われている会話体は馴染みが薄く、聞き取り、理解のうえで時間がかかってしまう。しかし、日頃から「教科書で勉強する日本語は日本人が話している日本語とは違う。日本人が普段使う日本語を勉強したい。」という要望が多かったため、VCD教材を用いる際には会話体の説明や練習も行なうようにした。その際、会話体ばかりに学生の興味がひかれ、本来の学習目的から外れてしまうことがないように注意する必要もあった。

最後に、このように学生の要望を取り入れながら自由に授業ができたことは、学校での「日本人日本語教師」の位置付けが基本的な文法事項の指導や受験対策よりも、学生が日本語、日本人に慣れ親しむことということにあったためであり、私自身恵まれていたと感じる。

その後、少なくとも授業中に関しては「ああー?」という言葉聞くことが少なくなり、思わず出てしまったようなときでも学生同士で笑いあったり注意しあったりするようになった。けんかを売られたような「ああー?」で始まった上海での高校日本語教師としての2年間は何物にも変えがたい貴重な財産となった。